



世界最薄の土佐典具帖紙。繊維の一本一本の絡み合いまでよく見える(日高村沖名の「ひだか和紙」)

## 土佐典具帖紙

(高岡郡日高村沖名)

厚さ0.02ミ、重さは1平方尺当たり2g。あまりの薄さに向かう側が透けて見え、投げ上げるとふわふわと宙を漂う。高岡郡日高村沖名の「ひだか和紙」が開発した、世界一薄い土佐典具帖紙(てんぐじょうし)。その透明性と丈夫さで、文化財の修復用和紙として世界中から熱い視線が注がれている。

機械で極薄の紙をすく独自の技術を駆使する一方、下準備は昔ながらの手すきとほぼ同じ。化学薬品を使わないため「手間は10倍」(鎮西芳男副社長)だが、原料のコウソウの繊維が傷まない。だから極薄でも破れにくく仕上がるのだ。

先人からの贈りもの  
2010  
7月

## 0.02ミ、世界が認めた薄さ

\*1

国立公文書館(東京都)のほか近年は、特に海外から注文が殺到。ドイツの博物館では、活版印刷が発明されたルネサンス期の書物などの修復、補強に用いられているという。

鎮西副社長は「田舎の小さな工場ですいた紙が、文化遺産を後世に残す手助けになることに喜びを感じます」。今や、世界に信頼される紙に育った土佐典具帖紙は、脈々と引き継がれてきた技術の集大成だ。

(写真・文 石丸静香||高知新聞)

◇ ◇

「先人」から伝承されてきた技や知恵。それらを現代に生かす人や物を、高知新聞など全国の有力地方・ブロック紙(北海道新聞、河北新報、新潟日報、東京新聞、中日新聞、京都新聞、神戸新聞、中国新聞、徳島新聞、愛媛新聞、西日本新聞、琉球新報)の13社がフोटトリレーで紹介します。